

I 十勝岳連峰のフィールド

- 1 十勝岳連峰の自然
- 2 十勝岳連峰で見られる動植物



I 十勝岳連峰のフィールド

1 十勝岳連峰の自然

(1) 大雪山国立公園の概要

北海道の中央部に位置する大雪山国立公園(昭和9年12月4日指定)は、面積にして2,308.9km²ほどで、これは神奈川県とほぼ同じ広さになります。その名にふさわしく雄大な自然の風景美に恵まれ、日本で最も広大で原始性豊かな一大山岳公園です。

先住民族であるアイヌの人たちは、この地域を「ヌタクカムウシュッペ」と呼んでいました。いくつかの解釈がありますが、それは「湿地の沼や川のある神秘的な高原」という意味で、白雲の去来する神秘的な沼や高山植物の咲き誇る別天地を見て、こう呼んだと言われている。大雪山とは、ひとつの山を指した固有名詞ではなく、北海道の最高峰、旭岳(2,290m)を中心にした山岳の総称なのです。



大雪山国立公園を地質と地形の面から見ると、4つに大別できます。前述の旭岳を中心とする大雪山火山群、激しく噴気をあげ続ける十勝岳火山群、非火山性の石狩岳火山群、さらには然別湖を抱く然別火山群です。標高は2,000m前後の山岳群ですが、緯度が北にあるため日本アルプスの3,000m級に匹敵する高山環境をもっています。



また、大雪の山々の峡谷深く積もった雪は万年雪となり、この雪が源となる石狩川と十勝川は、それぞれ石狩平野と十勝平野を潤し、まさに北海道の母なる川であると言えます。さらに、この国立公園の大部分が寒地生針葉樹で覆われているため、数多くの動物の生息地として、あるいは数百種にのぼる高山植物の宝庫として学術的にも貴重な存在となっています。

公園内の火山地帯では多くの温泉が湧出し、黒岳山麓の層雲峡温泉、愛別岳山麓の愛山溪温泉、旭岳山麓の旭岳温泉(旧湧駒別温泉)、トムラウシ山山麓の天人峡温泉、緑岳山麓の高原温泉、十勝岳山麓の白金温泉・吹上温泉・十勝岳温泉、また東大雪には然別温泉、糠平温泉、トムラウシ温泉など、登山の観光の拠点であるとともに、著名な保養地となっています。



大雪山国立公園の南西に位置する十勝岳連峰には、北からオプタテシケ山(2,013m)、ベベツ岳(1,860m)、石垣山(1,822m)、美瑛富士(1,888m)、美瑛岳(2,052m)、鋸岳(2,008m)、十勝岳(2,077m)、前十勝(1,800m)、三段山(1,748m)、上ホロカメットク山(1,920m)、上富良野岳(1,893m)、三峰山(1,866m)、および富良野岳(1,912m)の山々が連なっています。

この山系は分水嶺をなし、東斜面からは十勝川本流とその支流、西斜面からは



美瑛川(石狩川の支流である忠別川の枝川)、富良野川、布部川(石狩川の支流である空知川の枝川)の源となり、それぞれ太平洋と日本海に流れ込んでいます。

十勝岳には数多くの爆発記録があり、十勝岳特有の広大な泥流跡地や旧噴火口、大正火口、62火口(昭和37年)などの爆発の歴史を示す大小の火口は、今なお噴煙や噴気をあげ、自然の偉容を誇っています。

十勝岳は十勝岳連峰の最高峰であり、「本峰」とも呼ばれています。その登山路は西斜面からのコースが一般的であり、泥流跡地や噴煙に包まれた火口、断崖絶壁の斜面、数々の奇岩、風に乗って運ばれてくる硫黄のにおいなどは、この景観とともに登山の醍醐味の一つです。

(2) 十勝岳噴火の歴史

故石山替治氏(明治7年山形県生まれ、美瑛町名誉町民)の懐古談に次のような話があります。

「早崎悦太郎さんは、明治30年、小作人を連れて今の美沢の奥地に入り、亭々とそびえる巨木のため、昼なお暗い密林地を開墾したのだが、周囲これごとく樹木で地形も見通せぬところから、小作人の一人が木によじ登り、見渡したとたんに発した言葉は、『あっ、山が燃えている！』であったそうだ。」

つまり、十勝岳の噴煙を見たのです。

この活火山は美瑛町に分布している火山灰から見ても、遠い昔から暴れ山であったに相違なく、現在、私たちが大正火口、62火口などと称しているのは、ごく最近の爆発を確認したにすぎません。

古くから白金温泉で行われていた十勝岳のアプフチ祭りの語源は、火の神を意味するアプフチカムイノミというアイヌ語からきているということから、彼らもまた、十勝岳には火の神が住んでいて、常に煙を噴き、時々燃え上がったと信じたに違いありません。この火山ははるか昔の代から生きてきたのです。

十勝岳の火山活動を地質学的にみると、今から2,200年前の噴火で高温の火砕流が流下し、白金温泉付近まで達しました。堆積物中に多数発見される炭化木は、この火砕流がハイマツおよび針葉樹林帯を焼き払って流下したことを示して

います。

数百年前から火山活動は、グランド火口の北西部に収れんし、ここに中央火口丘(丸山)が生じました。約280年前には中央火口丘から望岳台付近まで溶岩の流下する活動がありました。

以下の活動は、炭化木の放射性炭素年代から推定されたものです。

その後、安政4年(1857年)、明治20年(1887年)頃、大正15年(1926年)前後、昭和37年(1962年)および昭和63・64年(1988・89年)に噴火のあったことが記録されています。



【昭和37年の噴火】



【昭和63年の噴火】

(3) 防災の取り組み

十勝岳では、もっとも危険性の高い火山泥流による災害を防ぐため、1989年に火山泥流対策基本計画が策定され、それに基づいて防災のための事業が実施されています。

具体的には、

- ① 床固工 …斜面及び河床の浸食防止、泥流量減少
- ② 導流堤 …河川への泥流の流入防止
- ③ 砂防ダム …土砂の捕捉、貯留
- ④ 流路工 …泥流の氾濫防止
- ⑤ 大型ダム …泥流ピーク流量の低減

その他、十勝岳周辺には泥流・振動センサーやITVカメラなどが設置され、1992年には十勝岳火山砂防センターも完成し、十勝岳を監視しています。

十勝岳火山砂防情報センター →



2 十勝岳連峰で見られる動植物

(1) 植物

大雪山系のもつ魅力は、高山植物の種類の豊富さと群落の大きさにあるといっても過言ではありません。それは、山頂部の広大さと、降雨量の豊かさ、加えて大陸要素、北太平洋要素、日本要素の分布上の交錯点にあたっているからです。高度こそ2,000m級ですが、緯度が北にあるため本州の3,000m級の山岳と比較してもはるかに優れています。

十勝岳山麓は、北海道の代表的な針葉樹と広葉樹とが混じり合っていてできている汎針広混交林帯に属する地域です。ところが、大正15年の噴火で大量の泥流に見舞われ、既存の森林が失われました。その後、森林の二次的遷移が進み、陽樹のシラカンバ林が形成されましたが、現在はエゾマツ・トドマツがかなりの成長を見せ、遠からず、エゾマツ・トドマツ・ミズナラなどの陰樹を代表種とする針広混交林に切り替わって安定するものと予想されます。

【エゾマツ林】



北海道の多くの高山では、山麓から頂上にかかる垂直分布を見ると針広混交林、針葉樹林、ダケカンバ林、低木林(下部は主にミヤマハンノキ林、上部はハイマツ林)の順に森林の様子が移行しています。ハイマツ林より上部は一般に高山帯と呼ばれています。

十勝岳山麓では、美瑛市街～白金温泉間が針広混交林にあたり、白金温泉～望岳台間が主に針葉樹林とダケカンバ林にあたり、望岳台付近では低木林にあたります。本州中部では高山帯は海拔2,500～2,800m以上であるのに対し、すでに望岳台(930m)付近で高山帯の様相を示しています。

泥流の被害を受けなかった雲の平一帯には、植物群落のまとまりがあり、見事な花畑を見ることができます。美瑛岳へ向かう登山路は、ある時は花畑、ある時はハイマツ群落と、変化に富んでいます。ここには次のような高山植物が見られます。

①木本植物(木質組織の発達した多年生植物)

チングルマ、エゾツカザクラ、コメバツガザクラ、イワヒゲ、コケモモ、ミネズオウ、ジムカデ、シラタマノキ、クロマメノキ、イワウメ、ガンコウランなど

②草本植物(木質組織の発達が悪く、小形で細い茎をもつ植物)

エゾコザクラ、イワギキョウ、ミヤマリンドウ、イワブクロ、ミヤマクロスゲなど

また、泥流の被害を受けなかったもう一つの地域に、三段山の西斜面があります。吹上温泉白銀荘をふところに抱き、上部はハイマツ帯の間にキバナシャクナゲ、エゾイソツツジなどの群落を見ることができ、下部は樹高20数m、胸高直径70～80cmの針葉樹林帯にナナカマドやダケカンバが点在、また、高さ2m余りのササ類に占拠されるなど、斜面一帯の群落相は極めて明確な植生を示しています。

十勝岳連峰の森林限界は1,500m前後で、その森林限界を超えるとハイマツ帯(高山帯)となります。

大雪山系の植物は、シダ植物を含めて600種近くあります。そのうちハイマツ帯以上に生息するのが200種以上、さらに森林地帯に本拠を置く種類を除くと、いわゆる「高山植物」と呼ばれるのは170種ほどです。

大雪で見られる高山植物



エゾコザクラ



チングルマ



エゾツガザクラ



イワブクロ



キバナシャクナゲ



トカチフウロ

(2) 動物

十勝岳連峰に広がるエゾマツ・トドマツなどの大樹海には、かなりの種類の動物たちが生息していますが、その実態は定かではありません。一般的に知られるものとしては、次の動物たちを挙げることができます。

エゾシカ

シカは北半球に広く分布しており、日本にはニホンシカという種類のシカがいます。エゾシカはその一種で、北海道に生息しています。雄は大きいもので100kg以上、ロバか子馬に匹敵し、4つに枝分かれした大きな角を持っています。雌は集団で行動し、7～8ヶ月の妊娠期間を経て、4月～5月に出産します。生まれた子シカは生後まもなく立ち上がり、母シカについて歩き出します。



エゾナキウサギ

大小様々な岩が折り重なるガレ場で耳を澄ますと、時々「キチッ、キチッ」という鳴き声が聞こえてきます。ナキウサギは北半球の高山帯に分布しますが、日本には亜種のナキウサギが北海道にだけ生息しています。ハムスターほどの大きさで、体長15cm、体重100～200g、全身茶褐色の毛で覆われて、一見ネズミに見えます。

エゾユキウサギ

ヨーロッパ、シベリア、カムチャッカから北海道にかけて生息する野ウサギは、本州に住むものと、頭骨・形態などからみて別の種類とされ、特に北海道に住む野ウサギをエゾユキウサギと呼んでいます。エゾユキウサギは、夏は暗褐色、冬は雪のように真っ白な毛色に変わり、夜行性のため人目にほとんどふれることはありません。平地から高山まで生息域は広く、日中は草や岩陰などに隠れて寝ています。特に聴力に優れ、敵からすばやく逃げるすることができます。





エゾリス

体は少々黒っぽい灰色で、自分の体より大きいフサフサした尾を持っています。エゾリスは別名「木ネズミ」とも呼ばれ、道外に生息するニホンリスとは別種になります。頭胴長約25cm、尻尾20cm、体重約300gであり、ニホンリスよりやや大きめです。ほとんどが樹上生活で、巣は広葉樹の場合、キツツキの古巣や洞に作り、針葉樹の場合は住みやすそうな枝の付け根に適当な木の皮などを集めて作ります。エゾリスは昼行性の動物で、マツカサ、ドングリ、クルミ、木の芽の他、昆虫や鳥の卵も食べます。

エゾヒグマ

北半球に広く分布しているヒグマには、アラスカヒグマやハイイロヒグマなどの種類があり、エゾヒグマは北海道にだけ生息します。春と秋2度の毛変わりし、体毛も長く赤褐色、黒褐色のものがほとんどです。前肢の爪は極めて長く、木登りなどに適しています。水場のある森林に住み、雑食性で何でも食べます。主に草木の芽、茎の他、ヤマブドウ、ドングリ、コケモモ、ナナカマドなどの木の実、エゾシカの死体やサケなどの魚を食べます。主に夜間に行動し、体つきに似合わず敏捷で、藪の中でもほとんど音を立てません。視力は弱いですが、嗅覚と聴覚はよく発達しています。十勝岳周辺でも糞や足跡、目撃情報が多いため、登山時にはクマよけの鈴など音の出るものを携行していきましょう。



キタキツネ

白金温泉街から望岳台にかけて、その姿をよく見ることができます。キタキツネは北半球に広く分布し、イヌ科のアカギツネの一種です。大きさは頭胴長約75cm、尾は40cmほどです。体毛は淡い茶褐色、春と夏に毛変わりをします。キタキツネは雑食性で、野ネズミや昆虫の他、ハイマツの実なども食べます。行動範囲が広く、ときには山頂付近まで餌を求めて現れます。

クマゲラ

ユーラシア大陸に広く分布しており、日本では北海道や東北地方に生息しています。奥深い原生林や落葉広葉樹林に住み、留鳥で“渡り”はしません。全身が黒っぽく、大きさはカラスほどです。くちばしと目は黄色で、雄は頭上全体が赤色、雌は後頭部のみが赤色です。「キョーン、キョーン」と大きな声で鳴き、飛びながら「コロ、コロ」と鳴きます。木の幹をたたいて出す音はかなり遠方まで響き、枯れ木に巣くう昆虫類、幼虫などをよく食べます。現在では数が減少し、国指定の天然記念物として保護されています。



その他にも、エゾタヌキ、エゾクロテン、エゾライチョウなどが生息しています。

